

大正十一年二月二日第三種郵便物許可大正十一年一月二十八日印刷納本大正十一年二月一日發行(每月一回一日發行)

# 真生

## 創刊號

創刊の辭

眞生の意義

土屋觀道

追憶

小橋麟瑞

人間をたたく俎

教壇小使より

大道への祈り

大野顯道

寺院生活の改造に就て

ある日の夕

自由俱樂部

# 創刊の辭

眞に生きるにはどうしたらよいのであるか、人間としての生がいある生活がしたいものである。願くは此世ばかりでなく永遠に滅亡ない生命となり、凡ての周囲の人々と共に何等の争ふこともなく、常に無限の喜びと、望みとの中に、眞の平和の生活がしたいものであると之が私共の願である。

かうした眞實の要求はどんな人々の心の中にもほんとうの要求としてさぐりあてない人はなからう。そして、私共はかゝる世界の理想地を神の世界佛のみ國に見出したものである。そして私共はこの神の國に生き、この佛の世界に生れてこそ、初めて人類生活の眞意義をも發見し、人類生活の自由と正義と平和の世界をも初めて確立せられうるものを信ずるものである。

然に時代の變調は反て人類の本心に背き、世界思潮の動亂は益々人類文化の進展を疎害す。この時に當て人類生活の深き反省を中心とせる理想實現の運動は人類本然の根本要求として吾人の爲すべき當然の道である。

吾人は單なる名利に捕はれず、これを眞實の文化に貢獻け、神の世界と佛の心とを此土に來らすべきである。所謂、人類生活の理想實現として、人類の自由と正義と平和とを此土に現成せしめんと欲するものである。かくて眞人の生活は神としての生活となり、佛としての生活となる。人文の發達、文化の意義も要するにこの目的を完成するに外ならぬ。眞生の發刊も亦この意味に於て生れたものである。願くは、世界の人類をして悉く吾人と共に此の眞生の世界に住せんことを、ひとへに要求して止まぬものである。



佛の心と神の心とを此土に來らすべき

眞實の文化に貢獻け、人類の自由と正義と平和とを此土に現成せしめんと欲する

中島信二著 眞實の文化の發達

# 眞生の意義

士屋觀道

一眞生とは如來を中心とせる人類生活の謂である。宇宙の本體、萬法の本源を尋ねては神の創造を考察し、人類生活の理想を究めては自ら佛陀の生活を創建す、永遠の生命と無限の向上との要求も亦この完成に外ならぬ。宇宙の本體何者ぞ、萬法の本源、神の實體、如來の本質、探ね來れば一として不可思議ならざるはなく、吾人は何故か自己の本體と宇宙の本體とを比較し、自己の本源と萬法の本源とを探ね、自己の實體と神の實體とを考へ、自己の本質と如來の本質とを考究せずにはゐられない。今や吾人の要求は人類生活の理想を探ねて神の生活と共鳴し、如來の理想と合一するの要求に自覺した。永遠の生命も此の上に見出され、無限の向上も此の上のみ確立せられて來るのである。生命の存続も財産の蓄積も名譽の本質も畢竟唯この神人の生活を完成し、佛陀の生活を體現する上のみ其の存在の意義を爲すものである。

靜かに思へば宇宙の創生も、文化の進展も、人類發生の本質も、此の理想實現の上こそ眞實生活の妙諦を味ふことかのできるのである。世界の平和も人類の自由も正義も博愛も、この神を中心とし、如來を中心としたる人類生活の上こそ、始めて眞實の意義をなすものである。されば人類生活の根本要求

は常恒にこの理想を理想とし、神の國、佛の國を理想とし、自から生きんとする根本運動といふ可きである。神を禮するも、佛を拜むも、其の心の本源は自ら神の生活を要望し、佛陀の生活を體現せんとする本具佛性の自我實現といふ可きである。悠久たる天地の問少しく眼を大にして、天地創造の進展を眺め、萬有展開の秩序を究め來る時、宇宙創成の昔より人類理想の進展は刻々として一大理想の實現として發現せられ、人類の發生、民族の移動、國家の興亡、個人の生涯、眺めれば一として此の神人生活の完成に進み來らざるはないのである。大にしては日月星辰、小にしては萬法一塵の起滅運行に至るまで、一として宇宙大道の本心に違ふものはない。

され、今時の歐洲大戰は社會生活の困乏となり、世界思想の動亂は人心不安の状態となつた、これはたして人類生活の幸福といふべきか、少くとも此の不安そのもの生活に於ては決して望まじきものではない。謂所物質文明の餘弊として人類生活の平和を破壊し、人類文化の進展を毀損し、社會生活の安泰を危からしむるものである。然乍らこれ主として、宇宙進展の大道を誤るによつて來る人類私欲の變調に過ぎず、かくて時代は進展し、展開して、來るべき人類平和の要求は各人生活の反省となり、理想實現の一大轉期は創生されつゝあるのである。今や奴隸的人類生活の時代は過ぎて、自由と正義と平和を求むるの自覺となり、更らに人類生活の本義を研めては永遠の生命と無限向上の世界とを發見し、永劫變りなき人類理想の天地に生れ、初めて人生至幸の眞義を悟り、眞人生活の妙境を觀しては理想實

現の妙諦に徹し、人類生存の意義を觀じては神人生活の體現を期するに到るものである。斯の如きの萬有進化の發達は宇宙萬法の本源より本末一如の自覺となり、萬法歸一の妙境は如來中心生活となる。されば吾人の眞生は斯かる眞實の要求であつて人類生活の根本規範であり、又これ人類生活の中心生命である。

二人類文化の意義よりいふも、時代思潮の中心より見るも、時代は正に人類の自由と正義と平和の上に人格中心の要求となつた。自己の個性を無視せざる宇宙理想の實現である。謂所現代社會の主要問題は一として此の人格中心の自由正義の大道より出發せぬものとはないのである。

今靜かに人類文化の眞義と時代思潮の變遷を考察すれば宇宙創生の時代は暫く措くとするも動植物の時代より、人類民族の生活に至るまで、一として自己の保存と種族の繁榮とを計らざるものはない。これ實に一切生物の本能的要求とも云ふべく、此の間、氣候風土の關係より種族消張の變遷は之ありとするも今尙時代はこの情態を操り返しつゝあるのである。乍然この間更らに大なる注意を以つて社會進運の大勢を直觀すれば今や時代は一大動亂の中に於ても更らに一步の進展を來たしつゝあるのである。而も其の進展の變化たる之を大きく生物進化の發展に眺め、人類思想の發達に徴すれば世は進々として一大向上の一隔を指して人類文化の一大自由の天地に向いつゝあるのである。恰も産氣ついた産婦の一大苦惱の中にも其の内に胎める産兒は將に新生の氣分に充たされて此土に現出せんとする夫の如くに、時

代思想の一大潮流は今や混惑せる思想動亂の中よりも、新眞自覺の大曙光として神人の出現が來たさ  
れつゝあるのである。

今や時代は君主專政の奴隸的時代や貴族政治の專横時代や、成金階級の特權時代も過ぎて一般人類の  
幸福を中心とせる人格尊重の時代が出現しかけて來たのである。今や特種階級制度の高下を以て其の  
人の高下を論ずるの時代も過ぎて正に其人各自に於ける人格的自覺尊重の眞生の時代が來たのである。  
所謂時代思潮の進展は尠くとも其の來る可き時代の眞光として、價値の世界を中心とせる人格中心主義  
の一大運動が顯はれて來たのである。其の運動とは何者ぞ、夫が即ち吾人の主張する如來を中心とする  
人類生活の向上運動である。この主義たるや正にこれ人類思想生活の中心生命であり、又これ佛教其の  
者の根本生命である。

三釋尊出世の本懷は徒らに衆生をして諸佛を禮し、諸佛を供養し、諸佛を讚歎せしむる爲めのみの出  
現ではなかつた。若し出來ることならば一刻も早く速に一切衆生の佛智見を開示して一切衆生の各自  
をして宇宙の大道を體現し、等しく正覺を得しせるにあつたのである。もとより佛教發生の時代として  
人類文化の要求は一般的當時の人として直に正覺を得しむるには到らなかつたと雖も、この驚く可き一  
大神人の出現は少くとも當時出生の人々をして自から正覺の大道に自覺せしめ、一般人類の最高理想を  
實現するの可能を自覺せしめたことは明かに凡ての佛典に於てこれを證する所である。而して此の自覺

と信仰とは少くとも夫以來人類生活の最高理想となつたと云ふ可きで、殊に大乘佛教の中心生命とな  
つたのである。然るに釋尊滅後彼の理想の餘りに宏大無邊なる反つて凡俗の俚耳に入らず、或は謹直に  
過ぎては模倣となり、盲從に終り、徒らに文言儀式に捕れて眞實生命の中心を失ひ、或は徒らに尊傲に  
かまへては反つて神人の大道を誤まるに至つた。之を基督の心に眺め、之を孔子の本心に求むるに又之  
と同様の感があるのである。

然乍ら、人類本然の要求は之しきの事によつて其の本質を失ふものではない。其の形に於て佛教を離  
れたるか如しと雖も、反つて夫よりも更らに大なる人類一般の要求として、神人生活の大道は世界思潮  
の動亂の中にも人類の正義と自由と平和の上に現はれて來たのである。是れ萬法一體の原則として宇宙  
の本心が吾人の本心に激發して來たのであつて、人類理想の一大轉期といふ可きである。世人若し心を  
靜かにして世界思潮の進展を觀察せば此の思想動亂の其中にもこの壓えんとして壓ゆること能はざる人  
格尊重の自由平等の一大運動を發見することが出來るであらう。此意味に於て我が謂ふ所の人格主義は  
正に人類生活の根本要求である。

四 永遠の生命と無限の向上とは人生要求の最も根本的なものであつて、此の根本の要求は一切生物の  
本能的本心の大道である。故に此の理想要求の完成としては幾多の曲節は免れない所であるけれども何  
れの時代に於ても其人類生活の本質を觀察し來る時、各自本心の發現として自己自身の生命と人格向上

の根本的要求とは如何なる迫害妨げの中からも、更らに大なる力を以つても進展し來つゝあつた事は疑はれない事實である。ここに所謂永遠の生命とは現在に即したる永劫不死の生命である、否、生死一如の世界である。永劫不滅の自覺である。古今を貫く眞我の發見である。宇宙と一なる本心の世界である。天地と一なる大我の我である。肉我を超越し、小我を無視せぬ眞生の我である。無限の向上とは即ち價値の生活である。神人の世界である。人格の完成である。宇宙的生活である。全一的生命の生活である。而も小我を無視せざる理想の實現である。換言せば全一的如來を中心とせる神人の生活である。各自の個性を時處位の上に全顯たるの活動である。佛陀を理想とする人類の生活である。

然乍ら斯の如きの理想生活は一朝一夕にして充實完成せらる可きものではない。恰も小兒が母の胎内に宿りて漸時に生長して此世に出生し、やがては一人の人として生立つが如く、此の神人生活の理想實現も其の初めは人類思想の根本要求として極微の間に、星雲の夫れの如くに微かに共鳴を感ずるに過ぎざるもの、やがては各自に自己本分の自覺に催され漸時生長の曉に至りては自ら佛陀の自覺にも立つのである。されば吾人は此の道理を信知して遙かに如來の大悲を仰ぎ、自ら神人生活の自覺體現の到來を期す可きである。其の意味に於て吾人の理想は如來を中心とせし神の生活であり、大悲を中心とする佛陀の生活である。世界は日夜に進展す、我等の世界も日々更新すべきである。革新なき人類、向上なき民族、反省なき國民、理想なき人生は吾人の欲する處ではない。

五然るに世間往々にして吾人の宗教を知らず、徒らに批難攻撃、曲解誹謗して而かも得々たるものあるよしを聞く、中には自己の無安心なるにも氣附かずして、反て人の異安心を説く、もとより知らざるの罪とはいへ寧ろ哀れむ可く同情すべき人として之をいたはるべく、更らに進んでは自己の行動を反省して、淺薄皮層の模倣や、安價な私利的功利主義や對他的黨派的凡俗的な不徳義や、無信仰な排他的獨よがりの宗教や、瞞着的なる迷信は吾人の採ざる處である。此の意味に於て世間の批評も他山の石として全く無用でないかも知れぬ。加之吾人の宗教は如來を中心として如來の如く、神を中心として神の如くに日夜に靈化して行くことを常恒に心かく可きことである。

然乍ら、吾人は如何にして此の理想實現の楷梯を踏むべきか、是偏へに吾人が如來を中心とし、神を中心とする宗教生活を要求する所以である。殊に現代思潮の奔流はともすれば反つて眞人の要求を裏切つて人類生活の理想を妨げ、永く人類の至幸を來さざらしむる傾向もある今日、吾人はは更らに一層に我等神人の大道を理想として進むべきものである。

然るに時代變調の今昔を考ふれば人生僅に五十年、逝くものは已に水の如く、日夜に流れて止むことがない。而も此間、日夜に爲すところ何者ぞ、一度過ぎて又と歸らぬ今日の一日噫吾何を爲すべきぞや人類の一生を回顧して人類の理想を想ふ時、吾人は更らに一層の反省と理想實現の向上とに献身の努力を爲すべきではないか、徒に明かし暮さんは吾人の欲する所にあらず、願くは宇宙の理想を理想とし、

神かみの心こころを心こころとして、神人しんじんの大道だうだうに立つべきである。願ねがくば如来にらいの大悲だいひを中心ちゆうしんとして眞生しんせいの世界せかいに生いく可べきである。

出来上つてゐる佛と如何に調和せんと苦しむよりも  
先づ自らを掘れ  
自らの事實の中に佛が光て生れ給ふ  
佛を生んで佛に生まれて行く。

重三

- 極樂を先と定めず日々に手馴れし業を務め大切
- 念佛を口に唱へて心には怒り腹立ち愚痴と怠慢
- み佛と共に務をなしてこそ務の上に光現はる
- 心から我と忘れて彌陀頼む我身任せし小安さよ
- 日々の行ふ業を省て懺悔々々に世を送りなん
- 起臥しを彌陀もろ共に過しつゝ勵み働き清く生きなん
- 病むとても之も慈悲の中なれば心泰んじみ名を稱へん

追懺

小橋 麟 瑞

九歳の時から四十三歳まで前後三十五年煩悶に煩悶を重ねてすべての名譽を抛ち誘惑を拂つて専心に求められた出離生死の捷徑が今そこに開けて如来の限りなき力と慈悲とを全身に浴びられたのであるから大なる歡喜の情が湧くのも當然である。法藏因位の昔吾等ごとき下機の行法としてかねて稱名の一行を定め置かせられたと佛意に徹底された時に上人の總身が慄ひ上人の兩眼が涙に溢れたのも不思議はない求道の志が大であるだけ得道の歡喜も亦大であらねばならぬのである……(望月信亨氏著略述淨土教理史)……

それはうすら寒い風が樹々の梢窓を揺がして來る師走に間もないといふ十一月廿八日の朝であつた。其日から焚かれるストーヴの火も極めて穩かに教室の空氣を温めて居た、三時間目の時業も半ば過ぎて硝子越しに冬の太陽が啓いた本を眩しい程照らしつけて居た。井然たる理路と明快なる論評とを以て次から次へと嘯み込めて行くやうな叙述が重みのある聲で教壇から傳はつて來る。望月氏は兩辯の雄辯家である、咳一咳耳を傾け

て或何物かを要求する心持で待つて居ても、まだるつこくなる程其期待が充たされない事があるが一度何物かに乗ずると時に觸れ物に應じて透徹る程それが満たされることがある。斯うした氣分で窓際近くに日を浴び乍ら氏の講義に伴れてそれからそれへと本の上を辿つて行つた、捨聖歸淨——捨雜歸正——一向專修……「かくて佛意に基く上人三重の選擇本願は唯稱名の一行に金剛不壞の信仰を樹立し無限の壽光を體驗せられた法悦歡喜の光景は十六門記の所謂落涙千行に及ばれたといふ實にそうであつたに違ひない。」……氏の講義は續けられる「一體上人は九歳にして出家せられたが其動機から既に純淨であつて決して今日のやうな不精々々に修學するのは大に趣が違つて居たのである」自分はハッと想つて自分に立返つたが又續けられる講義をいつもの心持で聞き續けた「前後三十五年間煩悶に煩悶を重ね……法藏因位の昔吾等如き下機の行法としてかねて稱名の一行を定め置かせられたと佛意に徹底された時に……」氏の聲が急に曇つて來た。自分の眼が本を離れて弗と視線

を壇上に轉じた時それは何といふ嚴肅な光景だらう。氏の曇つた聲はヒタと歇んだ、話す人も聴く者も一樣に深い沈黙が続いて咳一つする者もなかつた。氏は上人の其時の心奥に直參する抑へ難い感激の情に觸れられたのである。進まんとして進む能はざる講義、還らんとして還る能はざる平靜は殆ど蔽ひかねた嗚咽に變り氏の雙の眸は涙に濕ほうて拭うに由もなく見えた。

俯けば其次の「上人の總身が慄ひ上人の兩眼が涙に溢れ……」の文字が今迄になくはつきりと讀まれた。左に懷した手を自分は出した襟は正しうし足は揃へざるを得なかつた。自分の信仰宗祖に對する態度それは餘りに迂濶な月並的なものではなかつたが、自分の宗乘に對する見解宗義に對する觀念それは又願れば餘りに放漫な傍觀的なものではなかつたか、氏の感激に同化せられて堪へかねた一滴が机に落ちた。

願れば宗教生活に入つてより既に幾年上人の御傳も幾度か拜讀し上人の尊い信仰を人にも説いた然しそれがどれ程自分のものとして切實に上人の

### 人間をたたく俎

「光明教壇小使より」

電車通りにある三方硝子窓定員百人の氣持の善い會館——私等の志に附施して下さつた話し場、此處を覗かれた初めての方は「妙な教會です、ね大な看板まで掲げて、一體爰は何をやる處ですか」と訊かれる。すると私は「爰ですか、茲は私等の魂の料理場です、懺悔道場です、毎金曜日夜は先生方や私共が定つてお話をさして頂きます、が華かな講演場や人氣取りの説教所ではありません、話されに來る處でなくて皆が話すつもりで集る處です、「説く」とか「導く」とか「授けられる」とか「覺える」とかの詞は爰には適用せられませんか。又一宗一教に立て自己色を他に強要する處でもありません、「宗教的」と云ふ鎧をも脱いだ裸の人間を鍛へる鍛冶場です、心の解剖室、自らを釘づける十字架です、然も衆人の前で卒直正明に自己を啓き供へる犠牲臺です。そして魂と魂とを觸れ歎ひと苦しみとを偕にする、私等には無くてはなら

御心持の中まで滲んで行つたらうか、今氏の眞實な感激の涙に接し自分を追懺すると共にそれが單に氏を學者として見て來た自分には意外な驚異でもあり意外な歡喜でもあつた。

一學期の初であつた氏の教理申を讀めば讀む程無駄な文句の一言も無かつたのをどれだけ嬉しくも思ひ信頼もしたろう然し氏が斯る感激の下に書かれたものであることを此嚴肅な刹那の光景に接するまで知らなかつたことは恥かしいことである恐らく多年苦心研鑽せられた結果として「求道の志が大であるだけ得道の歡喜も亦大であらねばならぬ」と結ばれた氏の言葉は氏自らが體驗せられた處ではあるまいか、此忘れたくない追懺の印象を記して本誌の創刊を祝することは限らない歡びである。(一〇、一二、一三)

ぬ愛の舞踊場です、來た人は一度で心から兄弟になれる縁結びの辻堂です、説教の切賣店では無いません、私は無理に引張り込みは致しませんが開いて行かうと氣が進みましたら聽いて行て下さいストーリーも燃えて來ましたからね……」

愉快に話しが終ると俱樂部でお茶會を車坐で開きます。

ゑ き 子

限りなき彌陀の大悲の身にしてみても

たゞ尊さに南無阿彌陀佛。

限りなき彌陀の光は日にまして

輝きにけり御名を呼ぶ身に。

稱ふればいつか我が身は消えさせて

光輝く彌陀のみくにへ

醒めぬればこゝに居ながら極樂の

み園の中に道をゆくなり

只管にみ佛をたのむ心こそ

み陀の心に叶ひけるかも

## 大道への祈り

大野顯道

今は判きり覚えてゐないけれど、冒詩人エロシエ  
ンコの長詩を讀んで一つのヒントを得た事がある  
丁度其頃それが私の心持ちに溶け込むにびつたり  
合つてゐたからである。因襲や傳統や形式の殻で  
固く閉ぢこめられてゐる小鳥がその生活やそして  
その運命を而も平和な調和した世界であるものと  
自認して得々としてゐるのであつた。覺めたるも  
のの眼には、その小鳥を包んでゐた堅牢な鐵柵は  
小鳥の生命と立上らんとする力を大きくも小さ  
くもする突進と停滯との間に割かれたる一條の綱  
張そのものであつた。

私は今ごしき岩根の間を縫ひ來つた大きな生  
命の流れが今や當に壁下千仞の斷崖に落ちかゝら  
ふとしてゐるのが身にヒシ／＼と感ぜられる、私  
は靜かに自分を見つめて私の現在の歩みを通して  
後にふり反つて見た時私の生活にエロシエンコの  
詩から得たヒントが何か囁いてゐる様に感ぜられ

自縛の武裝を捨て、白日の下に突出され、素裸の  
自分を自ら凝視した時、人間らしい心持ちと燃え  
出でんとする生命の力がマザ／＼と感ぜずには  
ゐられなかつた。そして四面絶壁のどん底に突落  
された時にも全身から澄み出る感激に満ちた祈り  
によつて、縋らずにはゐられない氣持ちになつて  
來たのである。且ては悔恨と悶えとで佛を拜み倒  
してゐた私の祈りが今私の全分をみ佛に捧げて祈  
りみ光の淨化の中に現實の自己を切り刻んで現在  
の刹那に於る自己に最も忠實に、創造的生活の連  
鎖をしつかり踏みしめて體現の大道の眞中に突き  
進まずにはゐられない様に感ぜられる。

(追慕せる辨榮聖者の一周御忌の日に)

## 森の釋尊

はら／＼と散葉のてゐる林の中をガサガサ落葉  
を踏み乍ら世尊が先に立て歩いてゐられる、五六  
人の弟子の頭が黙々として随ふ皆今の話を想ひ思

たのである。十餘年間の寺院生活——それは尊  
い私の経験であつた。けれ共白紙の様な私の幼心  
にもいつも一つの謎の様に思はれて、そこには味  
ひ得たものゝみが知り得る或寂漠とあきたらない  
不滿の去る時がなかつた、殊にみ佛の前に跪て讀  
經する時には一層その感じを深められてゐたので  
ある。劇壇に立つた役者が樂屋に歸つて泣き工合  
の悪かつた小役を叱つてゐる時の様な餘りにドラ  
マティックな二重生活が完全に意識されて而も當  
然らしく振舞はれてゐるのがたまらない程私の心  
をそのかした、こうした私の魂、懐れる方と實  
際生活とは、いつも反對の方向のみを指してお  
ぼろげな足どりて力ない妥協と調和と又體裁のよ  
い糊塗とで曳きづらいてゐたのである。而して『他  
人事ぢやない』と云ふホラチエースの言葉などが  
鋭く私の耳にひびく時灰色になり勝ちであつた懐  
れの世界に伸びんとする力が呼びかえされて強く  
なれば強くなる程現實の私が足元から覆されて、  
『汝等信薄き者よ……』と呼びかけられる時などに  
は、身震して昏倒せずにはゐられなかつた。漸く

ひに心の内に書き乍ら。

世尊はフト足を止めて四五枚の枯葉を片手に拾は  
れたかと思ふと後を振り向て、無雜作に其掴んで  
る拳を啓いて見せられた、皆の者は此突然の振舞  
に呆然と其握られてる葉を凝視した儘棒立になつ  
てゐた、中に一人だけが微笑の目で釋尊のみ顔を  
見上げた。其時莊嚴な聲で靜かに語り出された。  
衲はお前達に煩瑣な哲學や學者的思辨を教へや  
うともせぬ、かと云ふて極端な苦行や禁欲を強  
ひらうともせぬ。衲には吠陀の權威も婆羅門の  
知識も要をなさぬ。お前等も片々たる議論を弄  
んではならぬ、お前等の抱いてゐるものを緊り  
價值づけよ、自我を殺すな空するな。  
手の平からバラ／＼と其葉を零して又スタスタ  
歩き初められた。(尅)

## 寺院生活の改造に就て

A 寺院生活の改造に就て、何が最も大切でせう。

B 私は先づ寺院僧侶が各自に其の宗に於ける宗義を知ることばかりでなく、自分は果て眞實の信仰を體驗してゐるかといふことを反省すべきことだと思ふ。何事もさうであるが殊に宗教はたゞその宗義を知りたいといふことが信仰でないことを知らねばならぬ。宗教は各自に於ける其人の體驗の事實であつて、知つてゐること、實際信じられてゐること、は一應區別して反省せらるべきことである。

A して見ると信仰なき僧侶はどうすればよいのですか。

B 少くとも眞實に道を求む可きである。そして、信仰なき僧侶は寺院住職たる資格はない、宗教は學問ではない。宗教儀式や讀經の上手下手で信仰あるらしく人々を引かんとするは人を欺くものである。信仰なき僧侶は速に道を求むるか、さもなれば速く還俗すべきものである。信仰なき僧侶は

僧侶の資格はない。

A 然らば信仰ある僧侶は如何に求べきですか、

B 信仰のある僧侶は必ず、時代の犬勢に鑑みて人類生活の指導改善に努力すべきである。このことは必ずしも僧侶に限るものではないが殊に寺院僧侶の立場としては當然のことであつて一切を信仰生活につとむべきである。

A 具體的に今少しくわかり易く願います。

B 宗教信仰は人類生活の理想中心であつて其の形式は一定すべきものではないが今日のやうな、葬式法事の死人扱つかいばかりでなくて、社會人類の生活中心となるべき運動に立つべきである。大にしては人類生活の理想を中心として、社會生存の本義を知らしめ、殊に宗教信仰の中心生命を各人に確得せしむるの運動に立つ可きである。又小にしては一般社會の文化運動に賛與して、社會國家の改善につとめて人類生活の向上に資すべきである。

A 然らば社會事業と何等簡ぶ所はないてはありませんか。

B 否、近頃の人々の中には社會事業こそ宗教家の自分の如く云ひもし、又考へて僧侶の中にも之に走る人々が多いけれども、私の今云ふところのものは如來を中心にしたる信仰の上より出でたる僧侶の活動を云ふのであつて、未だ信仰も無き僧侶か信仰をも求めず、僅かに二三の貧民事業や、七日に一度の少年教會位いで小供と遊ぶことを如何にも宗教家の社會事業かの如くに考へてゐる事は

大なる誤りである。況んや過去の寺院の遺産を葬式法事のあがりもので生活し平生に大きな寺院に寢そべつてなすこともなくたまに、其の餘暇の間になす社會事業や寺院の救貧事業は考へものである。中には社會事業を名として貧民救濟といひ乍ら、その寄附によつて中流以上の生活をしてゐる人々さへあるに至つては更らに大なる反省を要すことである。

A さうするとあなたは社會事業はいかぬと云ふのですか。

B いやさうではない。私の考へでは今日ほど社會事業の急務なるはないと思ふ。故に今少々熱心

に全身的に其の事業に立つて欲しいのである。私の知つた先生や道友の中にも専心此の方面に力をいたしてせる尊い人々のあることを知つてゐる。

然乍ら夫は眞實信仰に生きた上から顯はれた事業であつて信仰を離れた人々のなすやうな事業ではない。私の云はんとするところは今少く僧侶が自己の本分を自覺したならば寺院改善の意味からも自分の檀信徒の上にも眞實信仰の宣傳につとめ。生きたる人類に生きたる宗教を宣布するといふことが更らに大なる社會事業でないかと云ふ事である。

A なるほど、さうすると、あなたの云ふところでは寺院としての事業は寺院そのものをして信仰の實際教化に立てと云ふことですか。

B さうです、一般としての社會事業も必要だがそのことは已に政府でも又相當の教育家や實業家もやつてゐることであるから夫等に任かしておいてもよい、否更らに進んで全く之は國家社會の當然の事業として夫にさして行くやうにすべきである。然乍ら、こゝに之等の社會事業の救済にあ

づかることなき富豪とか救済家或は貴族社會の人々に靈的生活の中心生命を與ふるの運動は誰がなすべきかと考ふればそこに私は僧侶の使命が一大要求として殘されてゐるのだと信じてゐる。即ち寺院は今や其の寺院そのものに居り其の天職の上にて一大自覺をなすべき時が來たのだといひたい。

A もうほかに改造する所はありませんか

B あるともまだ云ふべき事 なすべきことはたゞさんにある。以上は僧侶の根本的自覺をいつたに過ぎない。私は其他本尊の問題、寺院家族の問題、檀信徒との關係、葬式法事の改造、僧服問題などと考へてゐる。今後の社會は特殊部落のやうな寺院生活の時代は過ぎて、人類生活を中心とする理想實現の寺院でなければならぬ。宗教は人類に於ける生活中心の生命である。信仰なき宗教は虚偽の宗教である。

A では此の次には又その次をさかして下らう。有難うございました。

B では又來て下さい。其俱に人類向上の爲めに考へさせていたゞきませう。どうしても私共は今

少しく考へて、寺院生活の改造をせねばならぬと思ふ、信仰なき寺院は眞の寺院ではない。然乍ら一切の寺院を捨つるにも及ぶまい、どうすれば此の寺院をして眞實の意義あるものに改造すべきか問題である。

(妙 月)

せめても佛のみ名を稱ふとき

我もなかりき罪もなかりき

言の葉を設くることのいとはしや

只南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

み佛のよろこび給ふ子とならて

世にある幸をいづちもとめん

### ある日の夕

(自由俱樂部にて)

「御免下さい自由俱樂部の規則書を下さい」  
「はあそうですか、まあお上り下さい、今御飯が焦げかかつてゐるか、火鉢にでもあたつて一寸待なめて下さいな……。塵うも失禮、エ、爰には別に規則なんてありませんがね。まあ動起を云へば私嘗て少々煩悶し求むる氣に驅られてゐた頃。多くの教會へも這入で見ました、坊さんのお話しも聴いて見ました。が私には餘りに政策或は因襲的のよりか思はれず、却て反抗的に不愉快を感じるの多うございました。それで私は他に求めず此九疊半を抛り出して悠塵小羊共ばかり心から集て、如實の自己で抱き合ふ事が出來たら假令一人でも二人でも何塵に愉快だらうと思ひました、そして強め合ひ惹き合ひ魂の觸れて火花の發するところ本當に尊いものを發見しました。特殊なものを押賣せられずに最も自由に互々の立場で排せず犯されず、少の衝突もなく獨尊の儘で微妙な統攝を見ました、畫家だらうが實業家だらうが、或は牧師さん學生、音樂家、法律家、坊さん、男も女も悉く自分自分の信仰で異なる儘に相同じて相扶け無礙に樂を感じるを得ました。それで爰は誰の物と云ふ事は無く晝夜開放して、定日の外でも勝手に集つた人丈けで濫茶で甘談して行ける俱樂部です、而し土屋先生など御都合のいい時來て頂いて一層面白と且つ深く其御體驗に依て導いて頂く事にして居ります。」

「それで若き集りと題して居られたのですか大變文學的だからツイ惹かれて寄て見る歸になりました。そうです若い心を持ち寄りて自由に交換するのが全てです、此俱樂部を外的に公開的に積極的に大きくしたのが表通りの教壇です、此れが平常念佛の格好なら彼れは別時的道場ですね、暇な折には時々遊びにお出下さいな。雨降りの時には傘でも取りにね……」

大正十一年一月廿八日印刷 大正十一年二月一日發行(毎月一回一日發行)

定 一 部 十 錢  
 一 半 年 六 十 錢  
 價 一 年 壹 圓  
 編輯兼 發行人 土 屋 觀 道  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 東京市神田區駿河臺袋町一番地  
 印刷人 原 子 廣 宣  
 東京市外西巢鴨町二七二番地  
 印刷所 眞 生 社  
 東京市外西巢鴨町二七二番地  
 印刷所 眞 生 社

大正十一年二月三日第三種郵便物許可大正十一年一月二十八日印刷納本大正十一年二月一日發行(每月一回一日發行)

如く出さるるに創りしに  
念く創りしに  
田舎を知らぬを恥ぢるに  
十一五日に念す  
創刊の旨を  
から大變に思ふに  
おはるや  
七月廿三日に  
四月廿一日に  
上を  
十